

文学のアナ・ボル論争(3)

秋 山 清

これまで調べてきた昭和初年の文学論争においても、またほぼ同時期の『女人芸術』(一九二九年)誌上のアナ・ボル論争においても、結果としてはほとんど文学の論争というべきものがなく、イデオロギ―論争や革命論争といったふうのものにすぎなかったという私の思いを如何ともすることができない。

それを無論重んずることはできない。文学には文学のアナ・ボル論争がありそうなるものだ、とはいつまでも、これらのことの回想についてまわる歎声である。だが一言だけつけ加えておきたい。大正の十年代、昭和の四、五年までの頃には、文学者もまた革命を論じ考えることが、やや強く使命感としてあったのではないか、という情況についてである。今顧みればたしかに目的にたいする方法の誤りとしてこれらの論争は不評であらねばならないが、個々にとって大真面目な論争であったという面をも忘れてしまつてはなるまい。

そこに「文学と政治」にたいする新しい問題の提起があり、それは戦後になお十分に解決することできないままに、政治が文学を侮ったり、文学が政治に反発したり、をくりかえしながら現在もな

おつづいている未解決ともいふべき性格のものである。これはまた言いかえれば、ロシア革命の光茫が眩惑的に人々をとらえた時期における文学の、その政治的性格の中に文学自体が文学的覚醒を求めつつの迷いであつたといえるかもしれないことである。

「文学におけるアナ・ボル論争」の当時のやりとりを、回想的に紹介してみたところで、行きつくところも納得することのできる結論も、ないであろうと私は断言する。つまりもう、誰が何をいい、誰が何を反駁したということよりも、当時の論争のなかに、今日思ひ出してみるに足る、いくらかの価値ある発言はなかったであろうかという思いにつきる。論争というものは理を非に曲げても相手を屈服させようとする性格がつよいから、見るべき成果が多かろうはずもない。そのはずもない中から何かをくみとり得ればという思いである。

大きく見れば、当時のアナ・ボル論争の中には戦後二十数年後の、現在におけるものと暗合する主張や反省が含まれていたようにすら見えるところもある。われわれの立場からいえば、文学に介入

する政治の非文学性（それこそ反政治性）が今広くあらわにされてきたことなどである。しかしこのことは当時の主張が互に相手からないがしろにされたまま弾圧され、さらに戦争をくり、戦後の経験を重ねて今ようやく、当時ひそかに危惧されたものが、問題とされてきたといった程度のことにはすぎない。けっして昭和はじめの論争の経験が文学のために省みられたといえるものではなく、わずかに暗合するものがあることが注目され回顧されて、かつての論争の焦点が掘返えされるとしたら、望外のよろこびといったくらいのことである。

私自身、あれこれと当時の論争の過程を今追体験することによって、文学におけるアナ・ボル論争について一個の結論的見解に到達したとおもっている。それは『アナキストの文学』（一九七〇・四 麦社刊行）の第一章「アナキストの文学とアナキズムの文学」の項に書いた次のところである。

「プロレタリア文学運動における文学と政治の問題に対して、アナキストはどのようにマルクス主義文学との相違を明らかにし得たであろうか。それを、

文学――政治思想（ボルシェヴィズム）

文学――反政治思想（アナキズム）

という形においてとらえるなら、それはあまりに相似形である。文学が文学以外の思想等にひきずられ、それへの奉仕を強いられるという形において、これはまったくひたし姿であるといわねばならぬ。労働文学あるいは広義のプロレタリア文学がマルクス主義一辺倒の姿に堕してゆく過程において、そこから離脱したアナキズム系の文学者が文学集団をつくって出発するに至ったのは

まだいいとして、文学によってアナキズムの啓蒙を考えたり、思想宣伝の手段の一つと考えることが強くなった事実には、反省を強いられるものがある。

アナキスト文学者の集団がつくられたのはボルシェヴィキの文学集団と対抗するためであった。然らばそのたたかいはどう展開されたのか。というのは、それはどこまでも文学そのものによって争われねばならないはずのものが、文学によって争われなかったのではないか、という疑問を残しているからである。」

この私の疑問あるいは反省は次のこととかわかるところが深い。それこそ頂門の一針ともいえるべきものである。

「いかに自由をふり回したところで、その自由主義そのものが他の判断から借りて来たものであれば、その人あるいはマルクスの、あるいはクロポトキンの、思想上の奴隷である。社会運動は、一種の宗教的狂熱を伴うとともに、とにかくにかくのごとき奴隷を製造したがるものである。」（大杉栄「個人的思索」）

私が昭和はじめの左翼文学に起った論争を回顧して、その非文学性、政治的従属性を反省しているとき、そのはるか以前に大杉栄は、先達者による思想奴隷たるなという警告を発していた。それ程に革命ロシアにふりまわされていたのだ。先進国への傾斜を事としてきた明治以来の欧米追従が、自主自律のアナキズムまでを浸蝕していたのだ。日本の現実に立っての文学論ではなく、ロシア革命後に主張され、その変革に沿いつづけていた社会主義国の文学動向に、はるかに革命を遠望しはじめたわが国の文学者が追随せんとする一過程として、プロレタリア文学運動及びアナ・ボル文学論争を眺めるという横着な視点、客観的な観察がまるで欠落していたので

ある。文学が欠けており、文学の欠けたところに、アナ・ボル文学論争といえども発展するわけがない、と今になっては言いたくもないのである。

いまこう断言するとすれば、この「論争」についての回想もそれに伴う価値評価も、存在し得ないことになる。ただ、以上述べたことを事の大筋として見るとき、文学の論争あるいは文学研究とでもいい得べきものはその時期になかったか。もうすこし時期をずらせて、論争はすでに終ったとしてマルクス主義とアナキズムがほとんど同一土俵に相見えずになったと見えた以後に、何らかの文学論的収獲はなかったか。あり得たとし得るそのわずかな収獲の中に、ほんとに「アナ・ボル論争」といい得べき文学論、または論争はなかったか。あるいは論争ならずとも、新しい文学論的萌芽はなかったか、ということを考えてみたい。当然それは、論争とかわからぬところこそなければならぬ。

アナ・ボルを問わず左翼の文学の目的とするところは、人間と人間性の自由を思い、あるいは解放しようとする、ことを文学の目的の根本に置くことにおいて一致している。手段として政治と如何に対決するかにおいて、否定と肯定の対立があるだけである。それは政治を革新の軸とし、また手段として文学に君臨せしめるか、それを否定しつくすか、その差異ということに絞られる。文学が、革命と表現における各々の方法をも含めて具体的現実的に論争するとすれば、政治的革命的な問題によるのではなく、革命と人間との問題に、論争の課題は収約されなければならない。

このような方向を含んだ主張が、われわれの文学論争のなかにあったであろうか。

ここに有島武郎の言葉がある。

「たとえクロポトキンの所説が労働者の覚醒と第四階級的世界的勃興とにどれ程の力があつたにせよ、クロポトキンが労働者そのものでない以上、彼は労働者を活き、労働者を考え、労働者を働くことが出来なかつたのだ。彼が第四階級に与えたとと思われるものは第四階級が与えることなしに始めから持っていたものに過ぎなかつた。いつかは第四階級はそれを発揮すべきであつたのだ。それが未熟の中にクロポトキンによって発揮せられたとすれば、それはかえって悪い結果であるかもしれないのだ。第四階級者はクロポトキンなしにもいつかは動き行くべき所に動いて行くであろうから。而してその動き方の方が遙かに堅実で自然であるうから。」（「宣言一つ」一九二三年）

この主張には正直者の思いすがしがある。思想家の影響力や啓蒙を事実以下に軽んじてみせることで「私自身など物の数にも足らない」といった階級的反省の証しとされていることである。しかし、ここで注目したいのは有島が、労働者階級の社会的自覚、新しい社会の中心的存在とならねばならぬ労働者階級とその彼らの自主精神の発揚を重要視しようとしていることである。文学運動の使命として労働者・農民階級の啓蒙を重要視し、又はそれをもって文学の目的とするということにたいする先駆的批判がすでにここにある。雑誌「改造」に有島が「宣言一つ」を書いたのは大正十一年一月。文学のアナ・ボル論争よりずっと早い、ロシア革命をめぐる論争が大杉栄、山川均を中心としてたたかわされた時よりも後である。その「宣言一つ」のなかの次の言葉もまたこの同じ意見に立ったものである。

「彼等は民衆を基礎として最後の革命を起したと称しているけれども、ロシアに於ける民衆の大多數の農民は、その恩恵から除外され、若しくはその恩恵に対して風馬牛であるか、敵意を持ってさえるように報告されている。ほんとうの第四階級から発しない思想若しくは動機によって成就された改造運動は、当初の目的以外の所に行つて停止する外はないだろう。」

「私は第四階級以外の階級に生まれ、育ち、教育を受けた。だから私は第四階級に対しては無縁の衆生の一人である。——第四階級の為に弁解し、立論し、運動する、そんな馬鹿げ切った虚偽も出来ない。——世に労働文芸というようなものが主張されている。又それを弁護し、力説する評論家がいる。彼等は第四階級以外の階級者が発明した文字と、構想と、表現法とを以つて、漫然と労働者の生活なるものを描く。彼等は第四階級以外の階級者が発明した論理と、思想と、検査法とを以つて、文芸的作品に臨み、労働文芸と然らざるものを選び分ける。私はそうした態度を採ることは断じて出来ない。」

あまりに細心、清潔、非政治的非現実的というべき発言に終始していたかもしれない。しかし自分の階級的立場に良心的である故に、未来の階級たるべきプロレタリアとの間に一線を画しつつ、自己をやがて没落の階級者と断じたところから、労働者ならざる者の労働者文学や階級的社会主義的文学の主張との対立を敢えてしている態度を、否するようにしてまで、階級文学の立場を主張したのであると見るべきかもしれない。言いかえれば、有島の階級文学への主張は「自己を主体とする」ということに重点があった。（これは有島の発言以前のアナキストたちの、宮嶋資夫や大杉栄の文学にお

ける考え方と相通じるところのものであった。）これをその翌年平林初之輔の「文芸運動と労働運動」の主張したところと比べてみるといい。

「如何なる運動にも不純分子が集まる如く、階級芸術の運動にも不純分子が寄つてたかつてそれを利用し、くいものにしてしようと——実際に社会運動の中に、働くことのきらいなごろつきや、食いたおしやがまじりこむと同じように、階級芸術運動の中にも、文芸のいろはもわきまえない連中が、葉真面目な月給取商売はいやだからというので、あわよくば流行作家になりすまそうというぐえらい野心を抱いて飛びこんだものがあったことも事実である。プロレタリアの運動としての文芸運動はまずこういう人々の虫のよい野心に対して答うるころがなければならぬ。プロレタリアの文芸運動は流行作家の悪口をいう運動でもなければ、新進無名作家を引きたてたり擁護したりする運動でもない。無名と有名、流行と非流行は問うところでない。それは階級戦である。」

次にプロレタリアの文芸運動は文芸運動であるよりも先ずプロレタリア運動であることを念頭におかねばならぬ。だからその綱領は文芸上の綱領ではなくて、プロレタリアそのものの綱領でなければならぬ。プロレタリアの解放——それがプロレタリア文芸運動の唯一の綱領である。」（一九二二・六「種時く人」）

「階級闘争の決勝戦はただ本隊の衝突によりてのみ決せられる。文芸運動はこのプロレタリア大衆の運動と協調連絡を有しなれば全然無効である。大衆と離れた運動はただ徒勞であるか或は邪魔になるだけのものである。——要するにプロレタリアの文芸運動はそれ自身は絶対意義を有するものではない。——」（同

上、傍点秋山

平林の「プロレタリアの文芸運動は文芸運動であるよりもプロレタリア運動である」「プロレタリアの文芸運動はそれ自身は絶対的意義を有するものではない」という意見は、すでに後の『文芸戦線』『戦旗』等において発展強化されたプロレタリア文学論の見事な先駆となつてゐる。文学が社会革命運動の下僕たらんことの正当性を主張するものであり、文学の芸術的価値などというものは究極のところ問題とならぬのだということを明らかにしている。当然「政治と党」が優先し、芸術家も芸術も下僕たるべしという一本のレールが敷かれようとしていたのである。ここから青野季吉の「目的意識論」まではほんとにひと跨ぎというところに来ている。すでに運動の当初からマルクス主義系文学運動の主張は、政治のための文芸運動であり、芸術・文学のそれ自体の発展を考へることは、目的として軽蔑されていた。

これらの主張と並べるとき「宣言一つ」における有島武郎の第四階級者の文学についての発言「ほんとうの第四階級から発しない思想もしくは動機によって成就された改造運動は、当初の目的以外の所に行つて停止する外はないだろう」という言葉が、重い意味をもつて来る。有島の発言はたしかに芸術至上主義的にきこえる。当時は、「芸術至上主義」的ということだけで、階級的観点から軽蔑されたかもしれない。有島のいった「第四階級以外の階級の文学の主張者」たちによつてである。そしてやがて有島は死に、階級文学の主張者たちと「プロレタリア文学運動はそれ自身に絶対的意義をもたぬ」といって文学を軽蔑した者たちの属する左翼文学は華々しく活動するかに見えた。だが問題はすこしも文学において解決されは

しなかった。

文学のアナ・ボル論争は、この地点からこそ展開さるべきであつたのに、（事実はそのから出発していたのだが）然らざるままに、アナキストたちは文学に於てこの問題の論争を継続する実力をほとんど育てることなく、まったく非アナキズム的な「アナキズム（反政治思想）——文学」という政治的な過誤に立つてアナ・ボル論争をつづけようとしていたのである。敵の土俵で敵のルールで敵の掛声で立上つていたようなものだ。勝てようわけがない。

この有島、平林の文学主張があつてから五年後、アナ・ボルの共同戦線がつぶれ、アナキストたちの文学運動が、既述したように『新潮』『都新聞』その他における抗争を経た後、対ボルシェヴィズムとの実力差に加えるに、内部闘争の激しさからほとんど壊滅に近い状態に陥つた頃、中野重治が「芸術に関する走り書」『文芸戦線』という評論を雑誌『プロレタリア芸術』に発表している。『文芸戦線』に拠り、「日本プロレタリア芸術連盟」からアナキストを締め出した後のボルシェヴィキ派の文学者たちもまたそれぞれに内部対立をくりかえし、離合集散をつづけた。中野のこの論文も勿論その内部的闘争にかかわるものと見ることが出来る。ただ私が今これに注目するのは、当時若いインテリゲンチヤの集団として、「目的意識論」によつて集結を遂げたボル派の文学集団の中から、もつとも若若しくかつ戦闘的な左翼理論を提げて登場したと見られる日本プロレタリア芸術連盟の機関誌に発表されたこの中野の文学主張が、ともすれば私に、非政治的に読みとれるかと思ふことである。むしろ中野重治は有島のいったように、自己をプロレタリア階級（第四階級）以外の出身者という理由で無産階級者と区別などしていな

い。まずこうかいている。

「我々——労働者、農民、小市民、婦人、植民地人民、特殊部落民、学生、兵卒等々——の、パンと寝所と、罪のない談笑と学問とを求める声、いわば人間的な生活の最も微少な一片を求める声が、それを我々からむしろ取ったもののために立ち所に悲鳴に変わらされた。——」(芸術に関する走り書「プロレタリア芸術」)

と、そもそもから頗る発言は政治的である。またこうもいう。

「我々の社会的政治的存在は、専制的抑圧の下につぶされて居る被抑圧民衆としての存在であり、我々の一言にして言えば意識」は、この抑圧の鞭の下に悲鳴をあげ号泣の声を高め、この鞭を折つべしよるためには流血をいとわぬところの決意であり、その歴史的性質は帝国主義の段階における反専制主義である。」

(同上)

まことに戦闘的であり、政治的階級的発言といわねばならぬ。青野季吉や平林やあるいはこの時までの蔵原等の芸術論よりもはるかに、戦いの言葉である。そして更にこうつづける。

「われわれの芸術——労働者階級自身の芸術——それ故にはじめて全被抑圧民衆の芸術であるところの芸術は、かくて、実際の圧迫の上に圧迫の意識を附加することによってこれを更に圧迫的にし、また羞恥を公表することによってこれを『一層恥じるべきものとする』であろう。」(同上)

ここにおいてわれわれははじめて、共同戦線の崩壊以後、アナ・ボル論争の時を通じて、ほとんどまったく、はじめて、一種の文学論に遭遇したといえるであろう。如何なる立場から、それは語られ

てきたことであつたか、何を、如何に語り始めようとしているのか。次のように、であつた。

「先ず題材の問題がある。だがこの問題は我々において、既に解決せられた問題である。題材の取捨は、『現象としての』題材それ自身から出発しては永久に決定され得ない。それはただ題材が本質的に持つところの意味によってのみ決定される。」——

(同上)

「第二に如何に描くべきかの問題がある。何が描かれるべきかが題材の本質の意味においてのみ決定される以上、この問題もまた我々にとってすでに解決される問題である。鞭を鞭として描き、悲慘を悲慘として描き、恥部を恥部として描くことこそ我々の描き方でないならぬ。」——

(同上)

「第三に様式の問題が来る。そして我々の態度はここにおいても同一である。問題は様式それ自体からは出発しない。そしてこれらの藪医者どものみが、常に様式から出発し且つ出発する。——あれら藪医者どもは、芸術が何であるかに就いて根本的に無知であり、我々の芸術が今如何なるものでありまたなければならぬいかの問題を解決するべく全然の不能者であり、——」(同上)

引用が長きに失したかもしれない。四十年前の、正確に中野がマルクス派の何者らの集団を藪医者どもと軽蔑していたのか、ぼんやりとか思い出せぬながらも、このように今私が興味をもつのは、ここには政治よりも芸術が、芸術として論じられているかの如くだからである。先ず題材のこと、如何に描くかということ、そこにリアリズムの息吹きを私は嗅ぐものである。政治は上から、文学は下から、ということが、リアリズム芸術論にはあてはまる。そこからは

共産主義者中野重治の発言のなかに政治的論調が弱まり、芸術論的傾向の強まるものが感得される。むしろ中野の文学主張が反政治的な理論であるなどというのではないが、中野がマルクス主義文学者として、他の一派のマルクス主義文学者の「政治的文学論」の「非文学的非政治性」に噛みついて見ると、感興を覚えたということである。私の「感興」とは何か。もし昭和はじめのアナ・ボル文学論争が、かかる論者と相対立したのであつたら、あるいは今少し文学論争として何ものかを残し得たのではあるまいかという、悔恨のごとき思いなのである。

また私は新居格が、葉山嘉樹の『淫売婦』を賞讃していたことを幾度か記憶している。ボルの小説家葉山の作品をアナキスト新居格が賞讃するということは、作品評において、政治的対立を超えた芸術の場の存在することを証明したものである。しかもその『淫売婦』の評価の根本において、たとえば目的意識論者とりペラル好きの新居格とは異なるところがなければならぬ。それを究明することのないままに批評におけるアナ・ボル文学論争は、かくして永久に締め殺されたのである。文学・芸術における論争ではなくして、政治的対立にしか「アナ・ボル論争」が過ぎなかつたことを、証明しているのではないか。

太平洋戦争終結の日からさえ既に二十五年をすぎた今、さらにそれよりも十五年前の文学論争を回想する意味はどこにあるか。その以前に交されて、事終れりとしたものがそうではなかつた、またあるいは当時何ことも文学論として語られてはいなかつた等々のことにたいする、無責任への追及の思いからである。

何一つ解決していないではないか。何の役に立ったのかわからぬ

対立と分裂と論争。政治的色分けを強要したに過ぎなかつたその分裂と論争は、あの戦争の近づきとともに、予期しなかつたナショナリズムの前に忘却されてしまった。それらは別個のことではない。もう一度文学と政治の問題に戻して見よう。ロシア革命の担い手としてのプロレタリア、プロレタリアの党ボルシェヴィキ、国家の政治権力を握る党、その党のその権力に追隨することに何の躊躇も示さなかつた者たちの多くが、ナショナリズムと戦争に傾斜して流れ込んだ。世間知らず、世界知らずの若者が、米英を討て、東亜百年の平和、植民地解放、の戦争に心身を投入したのとは事柄がちがう。彼らにはいささかの経験と視野と論争とマルキシズムの世界観があつた筈だ。ところが抵抗するよりも従順し、戦争敗北後は心に傷もつかず、再び「プロレタリア文学」である。不動心か、とんでもない。そこに発見されるものがある。常に、文学にしろ政治にしろ、一辺倒の精神構造である。自分の内部にひそむ不調、不服従の思いへの不忠実である。すべて何ごととも唯一つのものへの帰服と従順に向うことをもって我が道とする封建的精神構造との分離の不たしかさに満ち満ちているのだ。そこから個立あるいは孤立することの不安をおそれる精神が温存される。そこに付和雷同と付和随行のみの精神と人格が形成され、多数決の彼方へ行列入して蠢動する。

アナキストの側においても以上のことは正と負の形において、日向と影の姿において、対立するが如くでありながら、実質はほとんど一つであつたというをはばからぬ。アンチ・マルキスト、アンチ・ボルシェヴィキ、これはいい。だが対立が正と負の形においてのみのものであつたら、マルキシズムと資本主義の対立は単純極まる近親憎悪(?)でしかない。ボルシェヴィキとアナキズムとの対立

は、政治と反政治、多数決と全員一致、権力と反権力とを以てする対立の固定から一步も出られぬままだ。だから一步動くとも全体が動き動揺する。反政治という政治思想と文学とのかわりが凝固してそこに生ずる権威主義が昭和のアナキズムを非活躍的な観念論に封じ込んだ。純正アナキズムに至って思想を観念に昇華してしまつた以上、アナキズム文学も文学活動の組織も、組織体であるからには害悪な権力の発生源として否定されることとなった。

日本人がボルになれば、アナになれば、あのようになるのであるうかと予想もされたような、固定的な一枚岩的超個人の姿として、それぞれに凝固してしまつた。これは「自由」というものの喪失に至ることを忘れた、イズムの亡者のよりあつまりということではない。文学のアナ・ボル論争の時期に若いアナキストの集団「文芸解放社」から発した数々の反ボルシェヴィキの論評は、今日ほとんど見るに耐えぬものでしかない。何故か。アナキズムは観念的に固着し、思想の純潔性の主張にとらわれて、現実にはたかう思想をわがものとするこのでしなかつたところに理由がある。あるいは具体的現実的に伸勢いちじるしいボルシェヴィキに対して、ただただ、絶対自由の観念に由るしか、対抗の砦が見出せないという敗北的自覚しか持ち合わせなかつたためだつたかもしれないと、かの論争の時期を遠望し回想する。だがほんとうに、たかかう文学論がアナキストになかつたのだろうか。その思想に根ざしたたかかう手段、その萌芽がなかつたということではなかつた。

「識者は云う。——我々の運動はもはや自然発生的な単なる叛逆芸術をもって満足してはいけけない。現在のプロレタリア文芸運動はあくまで我々無産階級の『目的意識性』を強調したそれ

もあり、他方は国を挙げる征夷大將軍の指揮をもってこれを囲み、同時代共通の武器と防具によつて敵味方ともに身をよろい、攻守を換えれば敵味方の区別の本質的にはまかつたくない、そして戦国時代を終結させるという、天下二分の戦争ではない。ともすれば論争は幻想の天下分目のたかいかいであるかのような幻想から、勢力の拡大を目ざし、運動としての観点を遠ざける。そうではない。如何なる形、如何なる角逐が新しい文学の創造に資するかという観点を喪失するなら、それは労組内の派閥抗争と異ならぬ。アナ・ボル文学論争はいくらかそのような様相を呈するかに見えていたのである。だから小野十三郎の次のような発言は、なお四十年をへだてて今日の生命を残している。

「共同戦線の時代は過ぎたのだ。妥協、提携の時代は過ぎたのだ。我々も亦我々の態度を決定すべきである。——我が国におけるこれまでのプロレタリア芸術論の大半がいづれも皆共産主義芸術論であつたことは我々にまで何を物語るであろうか。煽動、宣伝上手、インテリゲンチヤとしての自己の立場への無批判無反省、他人を勇気づける毒瓦斯としての自己催眠、これ以外に何物も得られないではないか。」

「——が、気運は動いてきた。生るべきものは生れる。自覚は必然である。生活が君自身に反映する。生活がものをいう。我々は我々自身の生活を基調にして諸君に社会に呼びかける握手、決裂、一緒になろう。離れよう。闘い！ しようがないじゃないか。」(同上)

反政治的思考——文学、という政治と文学とのボルシェヴィキと同型の発想によらざる見解を打出したことにおいて、この発言に

に迎合するところの集団精神に基礎づけられた芸術の要求であり、そのための運動でなければならない、と。——かくして我國のプロレタリア文芸運動は、ある意味では発展飛躍し、又他の意味ではここに完全にその正体を曝露したのだ。云いかえれば従来のウヤムヤな共同戦線の戦列の中から、抜駆けの功名著、コンミユニズムのABCが飛び出したのだ。ボルシェヴィズムの理論が断然頭角を抜んだのだ。ここに彼らが意味するところのプロレタリア文芸運動の転機——共産主義芸術家の勝利が存在する。」(小野十三郎 共同戦線の崩壊「文芸公論」一九二七・二)

「それは普遍よりもむしろ分裂である。不断の闘争、決裂、あらゆる共同戦線の崩壊である。猫も杓子もコンミユストでおさまつていられる程至極安易なものではないのだ。昔のようにコンミユニストやアナキストやダダリスト等色とりどりの連中が、お互に気持の上で感激し合つて、だらしない共同戦線を張り、そこから眠っているようなブルジョア作家を相手に豆鉄砲をうてるような暢気な話じゃないんだ。」(同上)

「我々は我々の戦列を見渡さなければならない。——その時塹壕は蘇るだろう。敵も味方も奮い起つだろう。全戦線に活気がみなぎるであろう。ほんとうの戦いが始まるであろう。」(同上)

注目すべきはかかる混沌の思想である。画一と統制を目ざすのではなく、「敵も味方も奮い起ち」全線に活気がみなぎり、そこから、ほんとうのたたかいが始まることを願うという、この思考の方向こそ、新しい文学運動の方向ではなかつたか。文学運動とイデオロギー闘争の微妙にして必然な、だから巨大なるべき本質的落差がここに予見されるのである。一方が難攻不落を誇る大阪城にたてこ

は今日にまでつづくものが潜んでいるといえよう。ここにこそボルシェヴィキのもつとも嫌う反統制的な個の存在を軽んじない運動の姿が示唆されている。そればかりか、インテリゲンチヤとしての自己確認のなかに、有島武郎における階級文学とプロレタリアならぬ自己とのかわりの反省に通ずる自覚がある。有島のいう「学者もしくは思想家の学説なりが労働者の運命を向上的方向に導くもの」という、謂わば迷信の肯定に立ち、そこから積極的にインテリゲンチヤとしての自己の立場を自覚確認した者の思考の強靱さが、運動の形態の多様化を暗示する。これは当時若いアナキスト集団であつた「文芸解放」の人々やその指導的理論家と見られた麻生義等の見解と、質的に対立するものをはらんでいる。それは相対立するものでありながら、当時のマルクス主義文学運動の中に「芸術に就いて無知な数学者ども」を摘発せんとした中野重治の見解と、革命理論としてではなく、芸術理論において双曲線を描いて、どこかで出逢うかもしれないと思わせるところがある。中野は芸術とは何であるかについて、小野は芸術運動とは如何なる形態であるべきかについて、ともにマルクス主義集団とアナキズム集団との当時における常識的な観念性に対して、一致し難いものををはめかしている。当中野重治はもつともアナキズムを理解し得ないボルシェヴィキであつたが、彼が芸術を論ずるとき理想主義がボルシェヴィキの路線からいくら外れるものであつたか、それは私の知る必要もないことである。

まず社会主義、あるいはボルシェヴィズム、さらにアナキズム、があつてそこから芸術を考えるのが左翼主義芸術観の一般であつたとすれば、わずかに片手の指にも足らぬ人々がいて、芸術における

マルクス主義と文学におけるアナキズムの観点に立つかの如くに見えたのである。

文学におけるアナ・ボル論争はその彼等によって闘わさるべきであったと追懐するものだ。小野十三郎が、共同戦線の時代は過ぎた、我々の芸術論をもって、ボルシェヴィキの芸術に挑戦せよと攻勢を示す発言をするまで、アナキストたちはほとんど敵の攻勢にたいして受身であった。共同戦線の中止、目的意識論に発するアナキストの排除、文学の政治と革命への従属宣言、その何れにおいてもアナキストは受身に終始した。しかしこの前後における小野の発言にはその他にも積極的且つ文学的発言が目立っていた。

「無産階級解放運動に於けるプロレタリア文学運動の役割とその文学理論の中心問題は『文学運動を全無産階級政治闘争に合流せしめよ。』ということの上にかかっている。何れにしろ文学運動をもって無産階級政治運動の一翼を直接分担するものであると考えることにおいて、彼等の見解は期せずして一致している。」(文学運動は何を為すべきか『文学解放』一九二七・七)

「文学運動が直接無産階級解放運動の一翼を分担するものでないことは、以上で瞭かだが破壊的啓蒙運動としての実行要素並びに相互批判運動としての結成能力、両者の有機的交錯による進展は必ずや無産階級解放運動上において、大いなる役割を演じるものであることを信じて疑わない。

ボルシェヴィキの文学運動がはたしてよく政治運動の一翼をとめ得るかどうかは我々の関するところではない。だがかりそめにそういう文学運動が存在する以上、これと徹底的に抗争しなければならぬ。」(同上)

この発言から半年以前に「生れるものは生れる、自覚は必然、生活は君自身に反映する、生活がものをいう」と個人の自覚とその自然発生性を文学運動の各個人における出発の上に重んじた小野十三郎が、その後の発言で、ボルシェヴィキの文学の政治的性格にたいする抗争を主唱している。この態度は正しいか。当時の事情からいえばアナキストにとって必然だったかもしれない。しかしこの文学から政治への文学抗争の姿勢は、永い目をもって考えるなら、絶対に当然であったとはいえないようだ。これは対立感情を押しつけるというのではなく、なお芸術論、文学の主張による抗争をこそ進めるべきだった、というのは、勿論現在における感想にすぎない。小野の姿勢が、なおどこまでも文学の問題に終始する一点を外してはいなかったことを、むしろ多ししなければならぬだろう。

私は、この「文学のアナ・ボル論争・2」(前号)において、論争の概略一覧表を提示し、そこに二群のものを明示しておいた。第一は(一)(二)の番号を付した一連の論争で、それについてはほぼ前回において紹介したつもりである。それについて今回はA、B、C、D等の記号を付したもののについて、その論争の主旨等を紹介し、筆者の見解を加えるはずであったが、それを放擲してしまつた。理由はこうである。

すくなくとも、この第二段階の論争においては、政治論争にすぎない論争ではなく、いくら何でも文学芸術論を如何なる形かに置いて期待したのでありながら、ほとんどそれは前回と同じことに終始するものであることを見た。だから、前回のときに残された比較的當時若かった人々、たとえば『文学解放』上のアナキストらの所論

といえどもこの期待に添わぬものであり、であつて見れば特に紙面を用いるほどでもないとして割愛することとした。そして、ひろく見わたして、アナ・ボル文学論争とどこかでかかわる論述の中から

拾つて、「文学論」を求めようとしたのであった。「文学のアナ・ボル論争 3」としてここに、わずかに、不備な紹介とならざるを得なかったのは以上の理由からである。(一九七二・二一九)

アテンション・プリーズ……

書物には誤植はつきものである。だれに聞いた話だったか忘れたが、誤植に目くじらを立てるのは愚かしい、誤植を見つける喜びもまた、書物を読む楽しみの一つではないか、とある中国人が述べたそう。

その話を聞いて以来、ぐっと誤植に寛容になり、校正能力を練磨する意欲が減退し、今日にいたっているが、しかし、そのほくにしてから、目に余るひどい誤植本にめぐり合うことが、最近、とみに顕著なようだ。これは出版業界の過当競争の反映なのだろうが、あえて一例をあげると、ライヒの『ファシズムの大衆心理』(下)(せりか書房 一九七〇年一月三十一日発行)には、ごく初歩的な誤植、たとえばインターナショナルイズムがインターナシナリズム、噴出が憤出、炭坑が炭

抗、労働が労働、というだけで二十四、五箇所を数えている。約二五〇ページの書物だから、一〇ページに一個所の見当である。

こうひよこひよこ、つまらない誤植に出くわすと、誤植を見つける楽しみもすっかり白らけてしまい、書物全体への信頼すら薄れてくる。誤植も誤植をさがす楽しみを感じさせるぐらいにとどめておきたいものだ。

これは誤植ではないが、最近盛んな復刻本におまけでついている注解や年譜にも、かなりお粗末なものがあるから、注意した方がよい。やや旧聞に属するが、中央公論社発行の『日本の名著』シリーズにはいつている『大杉栄』(一九六九年十一月十日発行)の補注は、その一例となる資格が十分ある。

それによると、バクーニンは「ベルリンで没」し、まだ生きている中村還一は

「一八九八?」と没年不明ながら死んだことになっており、一九六五年に死んだ水沼辰夫はまだ生きており、ヴェラ・フィゲネルの著作集は「一五三二年」に出版されており、正進会の幹部に和田久太郎の名前があがっており、といった具合に、すこし調査の労をいとわなければ、誤まらずにすむような誤りや、不十分な記述など約四十七箇所(二十三ページ中)に及んでいる。

一度犯された誤りは、一度だけで終わらない。本年一月に出た岩波文庫の大杉栄『自叙伝・日本脱出記』の年譜で、大杉の遺骨が葬式の「前夜」強奪されたという誤りの種子は、中央公論社版『大杉栄』年譜の記述(その前夜、遺骨かつばら事件)で時かれています。おそらくこの誤りの種子も、さらにたどっていけばどこかにあるのだろうが、大杉研究の進んだ現時点では、骨惜しみとしか言いようがない。(パーサー)

土着の原理

草 階 俊 雄

外来思想に対して伝統思想の優越性を主張することも土着ということであるのかも知れませんが、土着ということばが中心部で意味していることは、結局ひとつの学問論や生活論と言いかえてもいいことではないかと思ひます。

どの国どの地域にも純粹の伝統思想などはなかったはずですから、まず一般に思想が形成されるときにはたらく論理をふりかえてみますと、第一にいのちがあつて、それが激発されるときにことばと結びついておのれを確認しようとする、そのことばの体系が原初的な思想だと言えます。

ところで、そのことばは単体のいのちの内部からは発生せず、いのちのむれの関係からうまれてくるものですから、単体のい

のちよりしてみると外来の異物です。その外来の異物をだいたい血肉化したとき第一の土着化が終了して、つまり生活の日常化がはじまるわけです。

ところでこの日常化した生活がゆるがされると、ふたたび新事態に対応するいのちの攻撃、防衛、増幅がおこなわれる、これは換言すると、生活の中心部にあつたことばが使いふるされて新しいことばに出会わないか、新しいと思われていることばが実際にこの状態に適するか適しないかの問題の発生ということです。

土着はまずこのような生態学的な現象として把握されなければならぬと思ひます。

個人あつての集団ですから、集団における土着現象も、右のような個人に関して検証される原理ですべてが把握されそうですが、もうひとつ、純粹の個人にはおそらく

そなわっていない感覚——集団員とのこのころの交流がおこなわれる・その交流の網の目のひろげられる方向と範囲についての感覚が問題にされなければなりません。

交流の網の目を、歴史と風土がつくった国境と民族の方向へひろがらせて、その範囲でいちおう完結したがたが見られるとする感覚と、交流の網の目はかえつて、歴史と風土のちがひ、国境と民族の差別を、たえず原初的ないのちの混沌と無差別・無相の世界へもどす姿勢が補強するものと

集團における土着現象は、名目的な連帯關係にではなく、いのちの連帶關係に重心をかける、後者だと思ひます。

*

認識面から見た場合、こちらに自がありむこうに他があつて、自が他を損益計算と分析的思考の対象として見すえているという關係にあるかぎり、土着はないと思ひます。

一般には、てまえに自むこうに他があつてこそ、思考がその間にはたらくものとされいるのですから、實際は他そのものが最初から自に向きあうのではなく、他があると思われる方向、位置にはじめ自の分身が立ち——ということばは自がふたつにわかれて向きあい、この第一の自と第二の自の對話がはじまつてそれが思考であるという形をとると思ひます。

そして、この對話の進行の結果がふたつにわかれます。ひとつは、第二の自があまひその姿をかえないままで残ること。もうひとつは、對話の進行をバネとして第二の自が無限に他のすがたに近似するうごきをするということです。

後者は言いかえると、自己流ではじまつた思考が、自の恣意性のわくのそとへ一箇

独立した存在として成長してゆくということですが、思考にそのような独立性をあたえるものは、たとえば身体が一定の生活の型・リズム、論理にしたがつて健康であるように、思考の旋回活動がいのちに固有なひとつの型・リズム・論理をさがしあててそれを身につけるためだと思われま

ところで思考がこのような独立性をそなえたことを、その思考をいとなんだ当体に即して見ますと、自分から発した思考でありながら、それが法則的なものへと変身して自我の恣意性をくだいて信従させてゆくということ——つまり自我を無我化するということがあ

思想の土着化は、土着的思考がなければなりたないと思ひますが、思考が「もの」になるという様相、これが土着的思考なのではないでしょうか。

*

集團の一体感を回復させることと生産活動を重視すること、これが土着のもつとも一般的なイメージですが、ここからは定住

して一見物質生活の調整を中心としているような人間像がうかがひあがつてきます。

ほとんどのユートピア共同体はこの種の集團のいぢおうの完成形態ですが、それをそこまで凝結させた原動力は、国家・民族・村落といったレベルの共同体がもつ矛盾と頼みがたさの認識にあります。

したがって、物質生活の調整が中心とはなつていても、その調整の論理は国家・民族その他の地縁共同体のそれに反しています。一種独特の、いわば出家集團の風格を感じさせるのは、このせいでしょう。

創設の初心をうしなわず、ぐるりを大きくとりまく在家集團と巧みな均衡關係がとりつけられるかぎり、ユートピア共同体は存続すると思ひますが、しかし、土着が一つの枠のなかでの定住と共同生産活動と安心と安泰とのみ受取られる傾向を、現状ではうち破つてはいないように思ひます。

実は字句どおりの放埒遊行の精神こそ、いたるところに故郷ときよみだを見えて、土着の原質と言われるべきものなのです。が、この精神と現在のユートピア共同体はどこでどのように結びつくのか、という問題があると思ひます。